

設立 平成24年 5月15日
開塾 平成24年 9月 8日
発行 令和 4年 8月13日
(111号)



[事務局] 〒648-0094
橋本市三石台4-1-15
TEL 0736-38-3669
FAX 0736-38-3680
発行 学塾・中之島事務局

人間学講座
第118講

「辛かった時間は、
いつか宝の時間になる」
岩崎順子先生



■優しさは悲しみから

三三歳の時、夫の癌が分かり、そして最期を自宅で看取ることができました。亡くなっ

た夫の上に、幼い子どもたちは馬乗りになったり、頬ずりしたりしました。もうこれからは一緒に遊んだりできない、体はなくなるけれど、今のうちに遊んでいけよ、とまるで夫がそう言っているように思えました。

子どもたちにとって父親が亡くなるというのは大きな出来事でした。上の子が小学校三年、次の子が保育園年長さん、末っ子の落子は四歳でした。周りの人に助けてもらいながら、月日は経ち、落子が小学校六年生の時のこと、健康面の異常を知らされました。辛いことは一家族に一つにしてほしい、と心底思いました。

卒業後、落子は専門の医師にかかることとなり、そのときの先生は、子どもに対する接し方ではなく、大人に対するかのように話してくださいました。落子は先生に尋ねました。「先生、人はなんのために生きてるんですか」。

先生は、落子の顔をまっすぐに見て答えてくれました。「残念ながら、私にはその答えはわかりません。他の大人もおそらく答えられないでしょう。でも、もしかしたら、落子ちゃんも病気になることにより、人より早くその答えが見つかるかもしれませんね」。

その時の落子はかつて四〇キロ台だった体重は二〇キロ台となり、顔は真っ白でした。中学の入学式のあと落子は入院となりました。入院すると

二四時間点滴となったのですが、あるとき点滴を四〇分だけ外してもらえました。僅か四〇分の外出許可です。どこに行きたいかと問うと「髪に飾るピンを買いにスーパーに行きたい」と言います。女の子らしくおしゃべりしたいのか、と涙が出ました。点滴のとれた落子は、祖父の車に乗り、車窓を開けると入ってくる風に「風や！風や！」と言っ

いるときには励ますのではなく、寄り添ってくれる人が一人でもいたら、自然治癒の力が湧き、やがて種が花をつけるときがくるのだと思います。

■人は何のために生きているのか

東日本大震災のとき、避難所の壁に殴り書きがされてあったそうです。「優しさは悲しみから生まれる」おそらく震災で何か失くされた人の言葉だったのではないのでしょうか。

きたとき、きつというんなことが変わってゆくよ」と言われました。やがて月日が流れ、落子も回復してゆくと、手を放すことができるようになりました。

■回復してゆくなかで

少しずつ回復していきながらも、落子は入院を繰り返しました。心から寄り添っているつもりでも、家に帰るといつきつい言葉も出てしまう。あるとき苛々した私の言葉に傷つき、落子は泣きながら二階に上がってしまいました。申し訳なきがこみ上げ、私は落子に謝りの手紙を書きました。夫が末期癌だと判ったとき、泣いていた私を慰めてくれたのは、幼かった六歳の落子だったのに、その落子の辛いときに寄り添えずにほんまにごめんよ、と泣きながら書きました。手紙は渡すつもりでしたが、読みあげ、そして謝りました。

落子の風貌は、元気なころとは全く変わってしまいました。声が変わりませんでした。学校の先生は体力もない落子に放送係の役割をさせるなど配慮し、役割を与えてくださいました。今では落子は、朗読や司会の仕事をするなど「声」の仕事をしていきます。そうして落子は回復してゆき、私も崖から手を放すことができました。吉川さんはそんな私に「よう手を離した。でも、その離れた右手左手をぶらぶらさせてたらあかん。胸の前で合わせて、ありがとうございます」と感謝する人生に変えていけ」と強い言葉で言われました。

人は最後「ありがとう」と「ごめん」しかないと思います。落子も「ありがとう、ごめん」と言い、二人で抱き合って泣きました。そこに至るまでは一年八か月の月日が流れました。

「ピンチはチャンス」「乗り越えられることしか起こらない」などと人からは励まされましたが、渦中にいるときには、そんな言葉は耳に入りません。何よりも「一緒に泣こう」と言ってくれた親友のメールに救われました。人間はもとともと元気に生きる種をもらっていると思います。どん底に

「ピンチはチャンス」「乗り越えられることしか起こらない」などと人からは励まされましたが、渦中にいるときには、そんな言葉は耳に入りません。何よりも「一緒に泣こう」と言ってくれた親友のメールに救われました。人間はもとともと元気に生きる種をもらっていると思います。どん底に

ささらに「嬉しいことがあるときに、ありがとう」「感謝」は当たり前。辛いことがあったときにこそ「ありがとうございます」が言えたなら、本物や」と。その吉川さんも今は亡くなりました。

人には何のために生きているのか。生きているのではなく、生かされている、ということを経験して尋ねられたなら、人は幸せになるために生きている、と私は答えると思います。

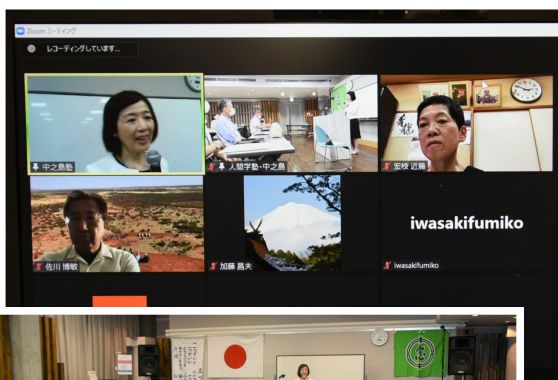
（抄録 中川千都子）

《感動語録集》

岩崎順子 先生

「辛かった時間は、
いつか宝の時間に!!」

- * やさしさは悲しみから生まれる。
- * 種を咲かせるために試練がある。
- * 感謝できる気持ちが幸せになる。
- * 人はなんのために生きるのか??
- * 人は生かされ生きている。
- * 不安や辛さの渦中で出会える人のご縁は、とてもありがたい。
- * 人は幸せになるために生まれてきた。
- * 壁にしがみついている手をいつか離すことが出来る。
- * その離すことが出来た手を合わせて感謝する。
- * 幸せは条件が揃って感じるものではなく、感謝することを感じるもの。そのためにも自分が充電して、あふれる力を他の人にも伝えていく。
- * 人は元気に生きる種をもって、生まれてくる。
- * ピンチは、チャンスと捉える。
- * 悲しみを味わったことのない人は、人間味に欠ける。傲慢な性格になる。
- * いま、いかに自分が幸せに生きていることをあらためて噛みしめました。
- * 「席に座ればみんな家族」居酒屋ののれん!!
- * 一緒に泣こうと黙って寄り添ってくれることが一番の助けになる。
- * 時と人のご縁に助けられて、辛かった時間は宝の時間になる。



《森 信三先生に学ぼう!!》

「いかに生きるか」

★ 一生の縮図

「一日は一生の縮図」というのは私の信条だ。一生は過ぎ去ってみないことにはわかりっこない。だが、自分の一生がどうなりそうかということ、いまのうちに見当をつけなければいけない。そしてその見当を見るには、一日の予定をどこまで果たせたかどうかということ、常に見ておらねばならない。つまり、朝われわれが、目を覚ますということ、赤ん坊として生まれたということ。夜寝るのは、棺桶に入るといことだ。一生の縮図がそこにあるのだ、

★ 十年一筋

世に、十年一筋の一道を歩むという人は少ない。ましてや二十年、三十年、一筋の道を歩き通す人は稀である。おそらく百人中、二、三人しかあるまい。いわんや、五十年一道を歩むに至っては、千人中二、三人が危うからう。しかしそれには、さしあたり十年一道を歩む。さすれば一応の土台はできる。九十九人が川の向こう岸で騒いでいても、自分一人は志した道を歩くだけの覚悟がなくてはならぬ。

★ 志を立てる

人間が志を立てるということは、いわばローソクに火を点ずるようなものです。ローソクは、火を点けられて初めて光を放つものです。同様にまた人間は、その志を立てて初めてその人の真価が現れるのです。志を立てない人間というものは、いかに才能のある人でも、結局は酔生夢死の徒にすぎないのです。

(森 信三先生

『運命を創る一〇〇の金言』より)

《わたしのハガキ道》

西村俊幸

自称ハガキ道2級の西村俊幸です。私のような者がこの文章を書いていいのかどうか迷いましたが、急遽、書かせていただくことになりました。

先ほど、ハガキ道と書かせていただきましたが、まさしく「道」に通じるものがあると思うのです。たかがハガキ、されどハガキだと実感しています。

(ふと思ったのですが、はがき、ハガキ、葉書、どれがいいんでしょうか：私は「ハガキ」で)

ハガキ道は、読書会に参加させていただいてから知りました。複写はがきの控えにカーボン紙をはさみ、ハガキの裏面に内容を書いていく。自分にも残る。これは、本当に宝ものです。

また、話は飛ぶのですが、あの寺田一清先生からのハガキの書き方の教えを守るようにしています。

まず宛名から。そして宛先の住所。内容は後です。

ハガキ道に出逢うまでは、年賀状か懸賞ハガキ位しか書いていませんでしたが、複写ハガキに出逢い、メールなどにはないものが見えてきています。やってみたいとわかりません！

といっても、複写はがきの控え一冊を終わるのに、1ヶ月、下手をするとな2ヶ月かかっているのです。1日1通も書いていないかもしれません。したがって、坂田道信先生などの師範や有段者の方々に比べると、まだまだです。

しかしながら、寺田先生に「百日道」を申し込み、百日間、ハガキを続けられたことはいい思い出です。

また、ハガキ通信も発行しています。平成26年10月から始め、もうすぐ百号となります。「やりはじめたら、苦しいよ」とも言われましたが、なんとかここまで続けていられています。20部程、ご縁のある方に送らせて、いや勝手に送っています(笑)

こんな私ですが、ハガキ道の初段をめざし頑張っています！

《塾生の本棚から》

石黒 尚

『80歳の壁』

和田秀樹 著 (幻冬舎新書)

私も今年5月で65歳になり「高齢者」の仲間入りを果たしましたが、森信三先生の言葉に『八十歳をすぎ、人生がいよいよ面白くなって来たのです』とあり、寺田一清先生も私が初めて京都ちおん舎読書会でお会いした時は80歳を超えておられ、先生の米寿のお祝いを鍵山相談役もご参加いただいて、ちおん舎で盛大に開催できたことは本当に楽しい思い出です。

また、私の父は90歳で亡くなりましたが、83歳まで現役の国語教師として一燈園高校の教壇に立っていましたし、亡くなる直前まで頭脳明晰でした。そして母は、今年の11月で99歳の誕生日を迎えますが、訪問看護師等の手助けを受けながらも、自宅で「ひとり暮らし」を楽しんでいます。

一方で世間に目を向けますと、こんなに生き活きた80歳代は少数派であり、自分も森信三先生や寺田一清先生、そして両親のような80歳をどうしたら迎えられるかを常々考えていたところ、この本がテレビのワイドショーで紹介されましたので、即ネットで購入しました。

この本の内容は、幸せな晩年を迎えるために、「老いを受け入れ、できることを大事にする」ことをテーマに私の疑問に答えてくれることがたくさんありました。そして、特に興味深かったのは認知症とうつ病は見分けが付きにくいということと、認知症は20年くらいかけて進行するので認知症と診断されてもまだできることはたくさん残っているのです、それを家族や周りが取り上げないことが大切だということでした。

他にも高齢者専門の精神科医としての意見をわかりやすく五十音カルタにされていたりで大変読みやすかったです。

四文字百語抄

感恩報徳

ことばはいのち

寺田一清 編



一燈照隅 (いつとうしょうぐう)

「一隅を照らす者これ国の宝なり」とは、比叡山を開いた伝教大師のコトバです。また江戸昌平黌の佐藤一斎のコトバに「一燈を提げて闇夜を行くべし」とあります。とにかく一燈です。この一燈をとにもかくにも究明把握しなくてはなりません。

毀誉褒貶 (きよほうへん)

森先生の語録に「毀誉褒貶を越えねば、一道は貫けない」とあります。そしられたり、けなされたり、ほめられもちあげられたり、一喜一憂し、人の批判を気にしているようでは、自らに課したこの一道を貫き通すことはできないと、覚悟のほどを示されています。

兀坐培根 (こつざばいこん)

兀坐とは、大地に根を下ろすように坐り続けること。培根とは、その根を培養すること。これは儒学者の岡田武彦先生独特のもので、静座の実相を伝えるに最も相応しいオリジナルな表現だと思います。東井義雄先生の教育実践記録に『培其根』(その根を培う)という不屈の名著があります。

苦楽一如 (くらくいちじよ)

「楽は苦の種子、苦は楽の種子」と昔から言われています。また、「苦中楽あり、楽中苦あり」とも言われています。要するに苦楽は一枚の紙の両面です。易で言われる「一陰一陽」もこうした意味です。「物事すべて両方いいことなし」に通ずるコトバです。

《人間学塾・中之島》次月日程

第十一期「入塾式」

◆ 日程 9月10日(第二土曜)

受付 午後0時～

開式 午後1時～

終了予定午後3時頃

◆ 会場 大阪市中央公会堂

6・7・8会議室(二階)

◎ 第11期への申込(継続)は、

お済みですか？

【お願い】

受講料払込について!!

送金先口座

三井住友銀行／河内長野支店

普通 1560095

口座名 ニンゲンガクシユカノシマ

受講費 継続の方 68,000円

新規の方 78,000円

払込期限 令和4年8月31日

※ 塾運営の都合上、ゆうちょ銀行口座の利用を取りやめ、三井住友銀行口座に一本化させていただきますこと、ご了承お願い申し上げます。ご都合が悪い場合は、世話人会計担当松本、或いは柴原までお問い合わせください。

《芳信抄》

埼玉県 山下武彦様

喜多川先生の抄録に改めて反省させられました。

「日本は諸外国に比べて『大人が勉強しない国』」には同意するところがあります。私自身教職に在った時は、それなりに学びもしましたが、退職後の今は、恥ずかしい限りです。「なんのために学ぶのか？」がわかっていなかったようです。森先生の言われたように「人生二度なし」現在の自分で良いか？と考え、喜多川先生のお話しに感動して即動くことにしたいと思います。

埼玉県 大出雅一様

「日本は諸外国に比べて『大人が勉強しない国』」の言葉が突き刺さりました。そのために大人が楽しく学べる国にしたいために塾を開かれた喜多川先生は、文字通り「感即動」の実践者で在ります。「学びの真の目的は、人の在り方を真に学ぶために在る」と明確に言われています。「人の在り方」とは、何か独自性を磨くことと考えます。『ひと真似でない自分独自の生き方をする』これは森全一学にも通じる生き方でもあります。

岡山県 柴田久美子様

喜多川先生の「感即動」のことばを頂き、今すぐに実践と精進人します。

宮城県 加藤秀夫様

喜多川先生のお話し、「感即動」感じた時は、同時進行で、万事一つの物体として同化していること、伺えます。森信三先生の「仕事の根本」即時処理とも一致します。

広島県 坂田道信先生

中之島ニュースに参加させていただいていましてうれしいことでした。私の場合は「複写ハガキ」を書くことで、育てていただきました。人生の大学でした。

お礼を申し上げます。

愛媛県 桂 誠司様

喜多川泰さんの本は、数冊読ませて頂いたことがあります。学生時代に、こういう本に出会えていたらなああと、思った覚えがあります。今般のお話しの中で、「人が一番輝いて見える時は、もう一度立ち上がるうとしていいる時」とありました。歳を重ねると、どうしてももう一度立ち上がるうとすることが、億劫になってきます。でもこの言葉には、背中を押す力があります。歳を重ねる度に、もっともつと学ばなければならぬと感じました。

愛知県 坂部智一様

喜多川先生のお話しから、できない事や、解らないことができるようになったり、解るようになるのは、楽しいことと思ってきましたが、その上、「美しい人になれる」と。学ぶことは爆笑とは違う面白さがあります。一生勉強と改めて思いました。「感即動」が人の在り方を磨く行動である。着手点を教えて頂きました。

ご挨拶

本紙「中之島ニュース」の編集を設立時より担当させて頂いてまいりましたが、今期・号をもちまして、卒業させて頂くことと相成りました。拙い編集紙面をお読みくださり、皆々さまには、本紙面をもちまして心中よりお礼申し上げます。

次号より担当者が代わりますが、紙面充実を図るためにも、構成等ご教示のほど、宜しくお願い申し上げます。

ありがとうございます。

人間学塾

・中之島

事務長 編集

宮本真弓

